

中央検査部だより

2016.9.20 発行 第58号



熊本地震

エコノミークラス症候群対策チームに参加して

生理機能検査室 永井仁志

熊本地震における被災された方々に心よりお見舞いを申し上げます。また復興活動にご尽力されている方々に心より敬意を表します。

今回の地震ではマスコミの影響もあり、車中泊や長期の避難所生活によるエコノミークラス症候群が問題になりました。診断には超音波検査が有用であり、これまでも東日本大震災などで超音波関連団体が検診活動を行った実績があります。今回、私は4/22から4/24の3日間、日本臨床衛生検査技師会より派遣され熊本大学病院循環器内科の掃本准教授をリーダーとするエコノミークラス症候群対策チームに参加させていただきました。私が派遣された場所は益城町保健福祉センターという比較的被害の大きかった地域です。本震から1週間経過していたこともあり、想像していたより落ち着いている印象でした。しかし被災地に入るのは初めての経験であり、被災者の方とのコミュニケーションは緊張しました。検診活動は5/5まで継続され、2023名中185名(9.1%)に下肢静脈血栓が見つかったそうです。私自身も4名に血栓を発見しました。

被災者の方々に下肢静脈エコー検査をして、「血栓ありませんよ」とお話しすると大変喜ばれる方が多く、下肢静脈エコーで被災者の方々に安心を届けることができたと実感できました。今後も災害時には医療従事者としてできることを行いたいと思います。

高次てんかんセンター開設にあたり、

高密度脳波検査、長期脳波ビデオ同時記録検査を開始しました

脳神経外科部長 藤井正美

てんかんは脳(神経細胞)におこる突然の異常な電気活動により、意識障害や異常行動などの発作(数分以内)を繰り返して起こす病気です。てんかんは人口の約1%を占める身近な病気ですが、診断や治療に困る事例もあります。本年8月から高次てんかんセンターが開設され、てんかん専門医による診療が行われています。全国的にみても充実した脳波検査機器を備え、山口県の拠点病院として最先端のてんかん診療を提供いたします。

高密度脳波検査、長期脳波ビデオ同時記録検査についての詳細は、後日掲載する予定です。



学会・勉強会参加特集



第 57 回日本臨床細胞学会総会(春期大会)に参加して

病理検査室 渋田秀美

2016年5月28日(土)、29日(日)、第57回日本臨床細胞学会総会(春期大会)がパシフィコ横浜にて開催され、出席しました。細胞診断が細胞診専門医(医師、歯科医師)と細胞検査士(臨床検査技師)との共同作業で行われるという性質上、日本臨床細胞学会はこの両者で構成され、本総会においても細胞診断について両者の活発な討議が行われました。今回は国際細胞学会議(ICC2016)との同時開催であったため、多くの外国人出席者の姿、掲示物の英語表記など、通常とは少し違った雰囲気での学会でした。機器展示会場では医学検査学会ではほとんど出展のない病理、細胞診検査に関する多数の機器展示が行われており、情報収集の場、記念品収集の場として利用させていただきました。今回は国際会議への出席はできませんでしたが、次回チャンスがあれば、発表は無理でも雰囲気だけは味わってきたいと思います。



日本臨床微生物学会 第8回地区研修会に参加して

細菌検査室 末永詩織

2016年7月9日(土)、10日(日)に愛媛大学医学部で開催された地区研修会に参加しました。今回のテーマは「細菌検査で困った時の対応を見つけようー顕微鏡・培地を駆使してー」ということで、細菌検査の基本であるグラム染色のことから、薬剤耐性菌の確認検査の応用的なことまで幅広く学ぶことができました。グラム染色は手技が簡便で迅速に行える検査ですが、菌名の推定だけでなく、背景の成分から感染所見を読めることがあります。様々な症例を経験し、改めてグラム染色の難しさを痛感しました。薬剤耐性菌の確認検査は、耐性機構によってさまざまな方法がありますが、今回はCIM法という、最近報告された簡便なカルバペネマーゼ検出法を学ぶことができました。今回学習したことを活かし、臨床に貢献できるよう努力していこうと思います。



赤十字血液シンポジウム 輸血シンポジウム 2016 in 九州 に参加して

輸血検査室 中村友里

2016年8月20日(土)に福岡で開催された輸血シンポジウムー緊急輸血とチーム医療ーに参加しました。危機的出血に対する院内体制の構築を含め、各職種の役割についてそれぞれの立場から話を聞きました。検査技師の役割は、在庫製剤の把握、同型血への切り替え、患者さんの状況・検査履歴の把握などがあります。輸血の依頼数や未在庫の製剤数の把握もしながら、製剤によるリスクだけでなく人的ミスを防ぐように、落ち着いて役割を果たす必要があると思いました。また、緊急輸血に携わるすべての職種のチームワークにより安全な輸血医療が成立します。ガイドラインやマニュアルがあっても、いざ危機的出血が発生したら混乱が生じるかもしれません。そのために準備は大変でも、院内訓練やシミュレーションを行うことは大切だと感じました。



編集委員：大元 中尾 永井 中村 出尾 末永

